

五行歌会



R6如月号

発行人・編集長 ざしきわらし
副編集長 山田 憲路

五行歌は自由な言葉で、自分の呼吸でうたを詠む

古代歌謡から発想したうたの短詩です。自由詩です。テーマは生活、人情、恋愛、風俗、自然、歴史、哲学……。何でもありです。全国組織「五行歌の会」(本部・東京)の草壁焰太(85)が1957年に着想しました。
楽しい言葉遊び〜と考えてください。今すぐ誰でも詠めることが魅力です。

1月一席ルナ、二席は末山

ひめぼたる五行歌会の第40回うた会は1月27日、二門市石切所のにこランスで開かれた。参加は6人。果林子さん、水無月子さん、すばい殿、北海道から初投稿の園嶋さんには不参加。うたは覆面Xの三好徐子さん(五行歌の会副主宰)を含めて11首、投票は9人。

新年の笑顔／納豆人生／パンツに歴史あり

★山田憲路うた鑑賞の記
一席のルナさん。新年の朝、ごみ収集の青年にごあいさつ。代わりに受け取ったポチ袋からは、とびつきりの笑顔がこぼれ出る。

二席の浪岡末山さんのうた。主無き家にも、手つかずの柿にも、雪は等しく降り積もる。この世にはもう、その雪を払う者はいない。三席のじぶんのうた。雪

国ではいとも簡単に、近所の坂道がスキー場のコースに变身する。これが噂のゲレンデマジック？
同じく三席のじーらんさんのうた。冬休みが終わり、

一席

ごみ初収集の朝
今年もよろしくね
と言ったら
とびつきりの笑顔
おもいがけないお年玉

ルナ

と思いきや
近所の坂道だった

三席

ガラガラガラッ
「おかえり〜」
今日から三学期
一番乗りは
いちねんせい

じーらん

晴天の朝だから
庭木の枝の
雪をゆすつて
落として
よろこんでいる

中野忠彦

知り合いのお母さん
80才でコーラに
はまったと聞く
何オになっても
「はじめて」の喜び

果林子

水無月子
「今年で最後にします〜」
年賀状仕舞いの便りが続々と
高齢になつたため
SNSに切り替えるため
だめ押しは郵便料金の値上げか

二席

無人の家
雪降る中に
とられなかった柿が
たわわに
実っている

浪岡末山

※以下は高得点順

パンツやシャツに
「Nタナカ」
1年前の
手術入院生活
蘇る
ま、生きている。感謝

ざしきわらし

「今年で最後にします〜」
年賀状仕舞いの便りが続々と
高齢になつたため
SNSに切り替えるため
だめ押しは郵便料金の値上げか

番外

既婚者のもとへ
三好叙子副主宰
出奔した娘
それでも母は
カトレアの花の組ぶとんを
あつらえてくれた

山田憲路

朝納豆
園嶋(そのひぐらし)
昼メシ抜いて
夜(よ)も納豆
ビンボー人は
納豆漬け

すばい

フランスの寓話と
初めて知った
ならば
お洒落として
火中の栗を拾う

今日から三学期。音を立てて開ける戸の奥には、子どもたちの第二のマイホームが待っている。
園嶋さんのうた。朝に夜にと、納豆をかき混ぜ、その日が暮れる。これがいわゆる、貧乏暇なし。
中野忠彦さんのうた。鹿威しのように、晴れた日の朝の静寂を割く落雪。時にその音は、人の仕業でもありと知る。
ざしきわらしさんのうた。マジックで記された、自分の名前が物語る入院生活。パンツにもまた、歴史あり。すばいさんのうた。神の啓示を受け、フランス王国のために、火中の栗を拾ったジャンヌ・ダルク。火傷ならまだしも、火あぶりは洒落にはならない。
果林子さんうた。「はじめて」は、挑戦と言う言葉と同義。ここは一つ、その勇氣にコーラで乾杯。
水無月子さんのうた。一年の節目を彩ってきた、年賀状の書き納め。時の流れに身を任せ、静かに筆を擱(お)く。
番外の三好叙子さんのうた。愛は、倫理を超えたところにある。母の愛もまた、言葉を超えた形あるぬくもり。

2024・1・27 うた会

三席

新年
初滑り
こゝはスキー場

山田憲路

朝納豆
園嶋(そのひぐらし)
昼メシ抜いて
夜(よ)も納豆
ビンボー人は
納豆漬け

ひめぼたる4年目、「ぐるっと」に

二戸市を中心とした地域情報紙「ぐるっと」2月5日号No.213で、発足から4年目を迎えたひめぼたる五行歌会（果林子代表）の活動が紹介された。NPO法人カシオペア連邦地域づくりサポーターズの取材。市立図書館で同12日まで開かれていた作品展示の様子なども写真付きで報告された。

「五行歌」誌・同人の掲載歌

★2月号巻頭佳作

中野忠彦

綱引きは
引っ張る力で
勝より
力を一瞬抜いて
引き勝てる

果林子

横断歩道を
渡り終え
車にお辞儀する
子の純真
永久保存
ざしきわらし

★1月号巻頭佳作

浪岡末山

昔柿の皮をむいていたのは
人間

女親が婆さんだった
今一人暮らしの男が
大量の柿の皮を前に
縁側に座っている

ざしきわらし
雨降りじゃないけど
地味な天気
北いわての冬は
じわじわ
来る
あと一歩
自分の
尻を叩いて

中野忠彦

素晴らしき歌集たち

★中島小春「風がすれちがう」

(本名・中島正子)

1944年、岩手県生まれ

百四歳の母と
今日の会話は
かぼちゃと
あずきは
いとこ同士か? などと

★宇佐美友見「海、はじまる」

(東京本郷五行歌会)

正面に どんと
岩手山
私の小ささを
思い知り
安堵する

★まる

「また虐待で子どもが死んだ」

高校生の時、
父が「一回だけだから」と
私の腫に指を入れてきたけど
あなたのその考えなら
一回人殺しても捕まらないん
ですけど?

★神部和子「ヒマラヤ桜」

(雪葩五行歌会)

ふと
いけなげなことを
したくなる
雪明かりの
やさしい誘い

★増田和三「こんなどうや?」

(金沢文庫歌会)

増田さんは、今南道也の筆名で「五行歌」を書き遣した。友人の良元(よし・はじめ)さんが、奥さんの依頼で遺作集としてまとめた。

藤七温泉山荘の
主賓は岩燕
客が
忍び足で
軒を潜る

★小谷要岳「きずな」

(舞鶴五行歌の会代表)

母の乳房は
蚕の匂いと
稲穂の香り
十一番目の
末息子

また一歩

果林子

秋の陽射しが
ふり注ぐ
野球場に
まばらな観客
のどかな日

すばい、休会に

すばい殿(軽米町在住)が、2月からひめぼたる五行歌会を休会することになった。このところ仕事の都合でうた会不参加が続いていたが、月会費をきちんと精算して休会に入った。「うたが詠めなくなつた」とのことだが、気持ちをリフレッシュして一日も早く復帰してくれることを祈りたい。

2022年8月うた会でダントツ一席だったすばい殿のうたを掲載する。

散るために咲いた
消えるために輝いた
無常と儚さと
何かを悟りたくて
また花火に見入る
すばい



「ワンニャン語のすゝめ」という、ユニークなタイトルの本を頂きました。筆者は豊高明枝さん。大阪の五行歌ひらかた歌会代表で、筆名は桑本明枝さん。

でも、歌集ではありません。サブタイトルに「言いたい放題! アッキー28号」とあります。そうです、エッセイ集です。とても痛快なエッセイ集です。

あけらかんと
あけすけに
あかるい
アッキー
あばれ!
ざしきわらし

と、こんな失礼な紹介をすれば、よほど親しいと誤解されそうですが、実はお会いしたことはありません。明枝さんは地域密着型情報紙「LIP」のスタッフです。エッセイはLIPに掲載されたものが中心です。ワンニャン語の秘密? も明らかにされています。頒価600円。岩手県内なら私を取り次ぎます。ざしきわらしまでご連絡ください。

